

次回、次回の会合には本務の都合上、残念ながら出席できません。本委員会の議論もそろそろ取りまとめの段階に入りつつありますので、以下、「世界に伍する研究大学」の候補と想定されている大学の現状についての私の認識、それを踏まえた提案を提出します。

白石 隆

「研究大学」として想定されている大学の現状はおおよそ以下のようなものとする。

- (1) 一大学のすべての部局（理工系、医学生物系、社会科学系、人部学系）が国内的に、まして国際的に、競争力を持っていることはありえない。いかなる大学にも、競争力のある部局（あるいはそのサブ・ユニット）と競争力のない部局がある。
- (2) 「研究大学」と想定されているような大学は、大学内ではもちろん、社会的にも、潰れることはありえないと考えられている。そのため、そういう大学の教員の間では、大学が国によってサポートされるのはあたりまえというマインドセットが抜き難く存在し、大学には常に、競争的環境を作ろうと努力する部局と居心地の良い環境を守ろうとする部局が併存する。
- (3) 学長の権限は制度的に大いに強化された。しかし、強いリーダーシップで改革を試みた学長のあと、しばしば、改革の意志の全くない学長が続くことはこれまでの歴史の示すところである。また、日本の大学では（米国の大学などと比較して）部局の自律性がきわめて高く、形式上、いかに学長の権限が強化されても、実態としては、その権限は相当に制限されている。これは教員人事、予算配分において、学長がいかに学部意志を「尊重」しなければならないかを考えれば、明らかである。

上の諸点を考えれば、「研究大学」と想定されている大学の現状をそのままにして、各大学に資金を提供することは、深刻なモラル・ハザードを生むだけでなく、「世界と伍する研究大学」を作るという目的の達成のためにも、きわめて効率の悪い方法であるとする。したがって、「研究大学」と想定される大学をそのまま一つのユニットと考え、ここに資金を提供することには強く反対する。

これに鑑み、以下を提案する。

- (1) 「世界に伍する研究大学」に想定される大学には「競争力のある部局（あるいはそのサブ・ユニット）」「競争力のある部局を作ろうと、競争的環境の整備に努力している部局」を「研究大学」として切り出す。これによって「競争力のない部局」「居心地の良い環境を守ろうとする部局」、「世界に伍する研究大学」を作ろうという試みに抵抗する部局を排除する。
- (2) 「研究大学」は大学院大学とする。（同じ大学のそれ以外の部局からなる「教育大学」部分と切り分ける。）大学院生は国内外から広く公募し、公正に選抜する。インブリーディングを回避する仕組みを導入する。

念のため記しておけば、優れた教員/研究者の中にも学部教育を重視する人たちは少なくない。また、同じ大学の中に大学院教育をミッションとする研究大学と学部教育をミッションとする教育大学が併存するのも別に珍しいことではない。重要なことは、研究大学においては、大学院入学、ポストク採用、tenure-track assistant professor 採用、tenure 審査と associate professor への任用、full professor 人事の各プロセスで、「内」の人が優遇され、インブリーディングが起こることのないよう、ルールを決め、運用することである。

なお、この提案は「教育大学」部門において、ごく少数の研究者・教育者養成のための「研究科」の存在を否定するものではない。

(3) 現在、「研究大学」として想定されている大学以外の「地方大学」にも、競争力のある部局（あるいはサブ・ユニット）、その可能性のある部局は存在する。こうした部局をコンソーシアムにまとめ、「世界に伍する研究大学」の枠組みで資金的に支援する。

(4)、部局、あるいはそのサブ・ユニットのレベルでどの大学のどの部局（サブ・ユニット）がどの程度の競争力を持つか、米国における分野別ランキングのようなかたちで常にモニターする機構を作る。この機構も「世界に伍する研究大学」の枠組みでサポートする。